

## 代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



時折、北風の吹くととても寒い日がある今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。早いもので2024年もあっという間に1ヶ月が過ぎ2月になりました。

さて、2月といえば、バレンタインデー（14日）が印象的です。このバレンタインデーはもともと海外のイベントだったようですが、どのように日本に浸透していったイベントなのでしょう。日本では女性が好きな男性に気持ちを伝えるためにチョコレートを贈る日といわれています。日本でバレンタインが始まったいきさつには、諸説あり、企業が商業目的で普及

させていったのが始まりのようです。そもそもバレンタインデーはどのような日かと調べますと、キリスト教のバレンタイン司祭が名前の由来で、3世紀ローマでは、皇帝によって若者の結婚が禁じられていました。結婚をすると戦場で国の為に命を捧げる事を妨げると考えたためです。バレンタイン司祭は、愛し合う若者たちを哀れに思い、密かに結婚をさせていて、それが皇帝にばれてしまい処刑された日が、2月14日だったそうです。その後、バレンタイン司祭は、恋人たちの守護神としてまつられ、処刑された日を【聖バレンタインデー】と呼ぶようになり、『恋人たちの日』になったとされています。

皆様も、若い頃の思い出を大切に、日々幸せに過ごして頂ければと思います。

まだまだ寒い日が続きますが、ぜひ、皆様も陽光にお出かけ下さいませ。スタッフ一同、皆様のご来所を心よりお待ちしております。

## サンライズの物語

### 突然の別れ—— 最期について考える物語



その方は統合失調症に若い時から罹患されていた方でした。

ご主人との二人暮らしでしたが10年程前にご主人が先に旅立たれ一人で暮らしていたのです。

娘二人が自宅へ連れて行き月の半分は二人の娘と孫を過ごす日々を重ねておられました。自宅では近所に長男夫婦が毎日訪問し内服管理等の介護をされていたのです。

自分でできる家事はルーティンで行い食事自分で作ったり買い物をしたり、近所の掃除をしたりと決まったことを続けていたのです。

精神通院のデイの送迎に関わったヘルパーさん達にも慕われ、お人柄が素晴らしい方でした。

そんな中別れは突然やってきたのです。ある日朝ヘルパーが訪問すると浴室で息を引き取っていたのでした。

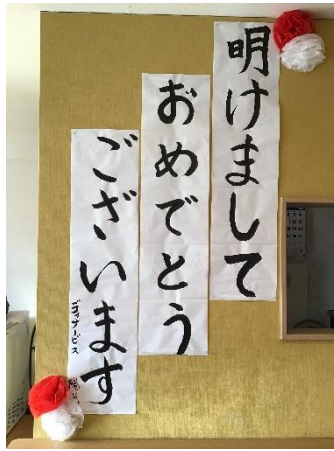
ご家族にとってかけがえのない存在だったお母様・・・ご長男様やお嫁さん、お孫さん達も失意に苛まれてしまったのです。

ご家族様は、お気持ちの折り合いをつけるには大好きだった自宅での最期であった事。お正月も娘さん宅でお孫さん達と過ごしていたことがせめてもの救いだったと話されておりました。

自分に置き換えると自身の最期はどんなふうになってくるのだろうと考えてしまいました。

突然、その時がやって来ても恥ずかしくない毎を送らなければならないと思うのです。

## サンライズのデイサービス陽光だより



### 辰年 壁紙制作

皆さんで、お花や龍のウロコ等を作り画用紙に貼り付けました。



### 誕生日

誕生日カードを差し上げおやつでパンケーキを出しました。皆さん「ありがとう」「ケーキ美味しい」と言って喜んで召し上がられていました。



## NEWS 今月のニュース

### 認知症高齢者ら タグで位置把握 GPSと併用、早期発見へ見守りの網拡大 市が実証実験

行方が分からなくなった認知症高齢者らの早期発見につなげようと、兵庫県三田市が専用タグを利用した検索サービスの実証実験に取り組んでいる。スマートフォン向けアプリなどと連携し、新たな見守りのネットワークをつくる。衛星利用測位システム（GPS）を使った従来型も併用し、実効性を高める。（橋本 薫）

市内では、店舗を訪れた認知症の人が自宅への帰り道を忘れて、家族が就寝中に外出したりして保護されるケースが発生している。現在、認知症か認知機能が著しく衰えている高齢者らは2789人と推計されている。さらなる高齢化の進展で2030年に3439人、40年には4726人に上るとされる＝グラフ。

市は、介護保険の認定を受けているなどの要件を満たせば、GPS端末を無償で貸与している。認知症の

高齢者らが行方不明になると、家族はスマホアプリで居場所を確認し、発見につなげている。現在は70人に貸与しているが、2週間に1回程度の充電が必要など課題があるという。

そこで、近距離無線通信「ブルートゥース」の技術を使ったビーコンタグ（発信器）による見守りサービスの実証実験を始めた。総合警備保障（ALSOK）の機器を活用。タグは縦最大2・8センチ、横5・6センチ、厚さ1センチと小型で、見守りが必要な人が身に付けて携帯しやすい。ボタン電池で約1年間は作動する。

位置情報の検知には、先行して見守りサービスに取り組む同県加古川市が開発したアプリを使う。アプリをインストールしたスマホが検知器となり、タグを携帯した人が近くに通ると反応する仕組みで、実験では市職員や地域包括支援センターの職員に参加してもらう。加古川市でアプリを入れている人が三田市に来た場合も検知に協力できる。また、対象者の自宅や市民センターなどの公

共施設には固定の検知機器を設置する。

実験には60～90代の認知症高齢者ら8人が参加し、参加者を増やしながら12月ごろまで続ける。アンケートで課題を探り、25年度の実装を目指す。

市いきいき高齢者支援課の久後秀樹課長は「GPSも併用して見守りの網を広げ、安心感を高めてもらいたい。市民の理解が進むきっかけになれば」と話している。



見守りサービスで認知症の高齢者らが身に付けるビーコンタグ（右）と固定機器＝三田市役所

<北海道新聞 24/1/31（水）>

広報誌「ライジング・サン」のバックナンバーは、弊社ホームページでもご覧いただけます。

ぜひお立ち寄り下さいませ。 <http://www.samaba.jp/back-number/>